ゴンザの『新スラヴ日本語辞典』の
重複みだし語について

いぬかい　いて
pxi13713@nifty.ne.jp

【要約】

18 世紀に編纂された新スラヴ・日本語辞典には、おなじみだし語が重複して収録されている項目が約 170 ある。本来ひとつであることばのつづりが２種類になってしまったものがおおく、その原因の内訳は、発音のゆれ 23 項目、古語の母音の残存 41 項目、子音の表記３項目、接辞の表記 43 項目、文語と口語 19 項目、そのほかのつづり４項目、修飾語の位置２項目である。ほかに、まったくおなじつづりのみだし語がまちがって２回収録されたものが 31 項目ある。

０．はじめに

「新スラヴ・日本語辞典」は、ロシアに漂着した日本語のよみかきのできない日本人の少年ゴンザが 1738 年に完成させた、世界初の露和辞典である。語数約 12,000 のすべてがキリル文字でかかれており、当時の薩摩方言を記録した貴重な資料である。みだし語はロシアの言語学者アンドレイ・ボグダーノフが選定し、ゴンザは、あたえられたロシア語単語の対訳日本語（薩摩語）をかいていった。

この辞書には、約 170 対のみだし語が重複して収録されている。重複の原因は、発音のゆれ、正書法の未整備、文語と口語のちがいなどのせいで２種類のつづりがあったことと、まったくおなじつづりのみだし語がまちがって２回選定されたことである。

本稿では、筆者が発見できた重複項目のすべてを、ロシア語側の要因別に分類することをこころみた。

１．ロシア語の音韻のゆれ

１．１　「ｙ」(u)と「ю」(yu)

みだし語で「ｙ」(u)と「ю」(yu)が交代したものが重複している例がある。

「ロシア語」（ラテン文字転写）	「村山七郎訳」	『ごんざ訳』（以下おなじ）
「ｕжикъ　ｓродник」(uzhik’ srodnik)	「同氏族の者」	『いちもん』
「ююжикъ」(yuzhik’)	「親類」	『いちもん』
「ｕзникъ」(uznik’)	「囚人」	『とがにん』
「ююзникъ」(yuznik’)	「足かせをかけられた人」	『とがにん』
「ｕродъ」(urod’)	「片輪者、異形の者」	『かたをもん』
「ююродъ」(yurod’)	「愚者、先天的に気の狂った者」	『かたをもん』

「у х а」(ukha)	「魚汁」	『いをんしゅる』
「ю х а」(yukha)	「魚汁」	『いをんしゅる』
「у д о л и е」(udolie)	「谷」	『ふぃろかたに』
「ю д о л ь」(yudoli)	「渓谷」	『くんだい』（下り）
「у д о л н ы и」(udolnyi)	「谷の」	『ふぃろかたにのと』
「ю д о л н ы и」(yudolnyi)	「渓谷の」	『くんだいのと』

１．２　「e」(e)と「я」(ya)

スラヴ語の「e」(e)と「я」(ya)はよく交代する。みだし語にも「e」(e)と「я」(ya)のつづりの両方が重複してのっている例がある。

「м е т у」(metu)	「掃除する」	『そぢする』
「м я т у」(myatu)	「そうじする」	『そぢする』
「Е м ъ　е м ъ」(em' em')	「食う」	『く』
「я м ъ」(yam')	「食う」	『く』
「в е т ч и н а」(vetchina)	「ハム」	『しをしたぶた』（塩したぶた）
「в я т ч и н а」(vyatchina)	「干し豚」	『ふたぶた』（ほしたぶた）

１．３　「e」(e)と「o」(o)

現代ロシア語にもある「e」(e)と「o」(o)の２種類の発音の混在ということは、18世紀にはすでにあったようで、この２種類の発音のつづりのみだし語が重複してのっている例がある。

「ж е л т о к ъ　я й ч н ы й」(zheltok' yaichnyi)	「卵黄」	『きみ』
「ж о л т о к ъ」(zholtok')	「卵黄」	『たまごんきみ』
「ш е в ъ」(shev')	「縫い目」	『ぬぃめ』
「ш о в о」[ш о в ъ](shovo shov')	「縫目」	『ぬぃめ』
「п о с о ш е к ъ」(pososhek')	「小さい杖」	『こついぇ』
「п о с о ш о к ъ」(pososhok')	「小さい杖」	『こついぇ』

１．４　「o」(o)と「a」(a)

ロシア語ではアクセントのない「o」(o)は、(a)と発音する、というきまりがある。みだし語にも、「o」(o)と「a」(a)の両方のつづりのみだし語が重複している例がたくさんあるのではないか、とおもって、さがしてみたところ、ひとつしかみつからなかった。

「т о к а р ь」(tokari)	「研ぎ職人」	『とぐふと』
「т а к а р ь」(takari)	「研ぎ職」	『とぐふと』

1．5　語頭の子音連続

ロシア語の語頭の子音連続は発音しにくいのか、母音をいれた形と両方がみだし語になっているものがある。

「д р е в о」(drevo)	「木」	『き』
「д е р е в о」(derevo)	「木」	『き』
「д р е в я н н ы й」(drevyannyi)	「木の」	『きのと』
「д е р е в я н н ы й」(derevyannyi)	「木の」	『きのと』
「ж р е б я」(zhrebya)	「子馬」	『むまんこ』
「ж е р е б я」(zherebya)	「子馬」	『むまんこ』
「л ж а」(lzha)	「嘘」	『うそ』
「л о ж ь」(lozhi)	「嘘」	『うそ』
「в ш и」(vshi)	「虱」	『しため』
「в о ш ъ」(vosh')	「虱」	『しため』
「д с к а[☆д о с к а]」(dska [doska])	「板」	『いた』
「д о с к а」(doska)	「板」	『いた』
「х р а к а ю」(khrakayu)	「痰を吐きだす」	『たんふぃくだす』
「х а р к а ю」(kharkayu)	「（痰などを）吐く」	『たんふぃく』
「ч и т а ю」(chitayu)	「読む」	『よむ』
「ч т у　ч и т а ю」(chtu chitayu)	「読む」	『よむ』
「ч и т а н и е」(chitanie)	「読むこと」	『よむこと』
「ч т е н и е」(chtenie)	「読むこと」	『よむこと』

1．6　「ш」(sh)と「щ」(shch)

キリル文字の「ш」(sh)と「щ」(shch)は、発音がよくにている上に字もにている。

ゴンザがこれを混同したことを、村山版の解説には「日本人らしい誤記」とかいてある。「л」(l)と「р」(r)の混同は日本語の発音の影響だから日本人らしいけれども、「ш」(sh)と「щ」(shch)の混同は「日本人らしい」とはかぎらず、つづりがみわけにくいことの影響もかんがえられる。

「ш у р у п ъ　в и н т ъ」(shurup' vint')「木ねじ、ねじ」		『まわすしぇん』
「щ у р у п ъ」(shchurup')	「ねじ」	『まわすしぇん』

２．ロシア語の母音の変化

２．１　ふたつの「ｅ」(e)

ふるいロシア語と現代ロシア語は母音の数がちがう。ふるい時代には「ｅ」(e)とよくにた発音の母音があって、ちがう発音であったが、18世紀にはすでにほとんどおなじだったらしい。1918年の正書法の改正で「ｅ」(e)に一本化された。以下、ふるい音を「E」と表記する。このことについて村山七郎は解説につぎのようにかいている。

「本辞典にはｅとEの著しい混用が見られる。Г о в Е н и ｅとその動詞形Г о в ｅ юが並べられていることなどはその好例である。ロシア語においてはこの時期に既に両者の発音上の差異が弱まっていたことを示す。これについてはその実態を示すものとしてそのまま活字化した。」

「ｅ」と「E」ではじまるみだし語は、どちらもすくないため、語頭でこの両方のつづりが重複してのっている例はひとつもなく、全部語中で重複している。

「в ｅ с н у ю」(vesnuyu)	「春を過ごす」	『ふぁるする』（春する）
「в Е с н у ю」(vesnuyu)	「春をすごす」	『ふぁるとる』（春とる）
「з ｅ л и ｅ」(zelie)	「草」	『くさ』
「з Е л и ｅ」(zelie)	「草」	『くさ』
「л ｅ т а ю」(letayu)	「飛ぶ」	『とぶ』
「л Е т а ю」(letayu)	「飛ぶ」	『とぶ』
「м ｅ ж а」(mezha)	「境界」	『しきり』
「м Е ж а」(mezha)	「境界」	『さけ』（さかい）
「м ｅ ж у ю」(mezhuyu)	「区画する」	『しきる』
「м Е ж у ю」(mezhuyu)	「境界を定める」	『さけする』（さかいする）
「м ｅ л ю」(melyu)	「挽く」	『ふぃく』
「м Е л ю」(melyu)	「砕く、細かにする」	『ふぃく』
「п ｅ н к а」(penka)	「麻の繊維」	『おのくづ』
「п Е н к а」(penka)	「薄膜」	『おのくづ』
「п ｅ т ｅ л ъ」(petel')	「鶏」	『にわとい』
「п Е т ｅ л ъ」(petel')	「雄鶏」	『にわとい』

「п е н ь」(peni)	「木の切株」	『つぶさ』
「п Е н ь」(peni)	「切株」	『きのつぷさ』
「с е д л о」(sedlo)	「鞍」	『くら』
「с Е д л о」(sedlo)	「鞍」	『むまくら』(馬鞍)

2．2　ふたつの「o」(o)

ふるいロシア語には、ふたつの「e」(e)とおなじようにふたつの「o」(o)があった。現代ロシア語にない「o」(o)の文字は、ギリシャ文字の「ω」ににていて、オメガとよばれている。18世紀には、ほとんどおなじ発音だったらしくて、ごんざの辞書の「o」の項目の最後にはつぎのようにかいてある。

「ωにはじまる語の部分も参照せよ。」

それにもかかわらず、この両方のつづりが重複してのっている例もおおい。ここでは「ω」のかわりに「O」で表記する。

「о б а」(oba)	「２つの」	『ふたつ』
「О б а」(oba)	「双方の、両方の」	『ふたつとめ』(ふたつとも)
「о б р а щ а ю」(obrashchayu)	「ある方向に向ける、変更する」	『かやす』
「О б р а щ а ю」(obrashchayu)	「変える」	『かやす』
「о б е щ а ю　с у л ю」(obeshchayu sulyu)	「約束する」	『くゆる』
「О б е щ а ю」(obeshchayu)	「約束する」	『くゆる』
「о б р у ч а ю」(obruchayu)	「婚約式を挙げさせる」	『　』
「О б р у ч а ю」(obruchayu)	「婚約させる」	『にゅぼもたする』(女房もたせる)
「о г н ь」(ogni)	「火」	『ふぃ』
「О г н ь」(ogni)	「火」	『ふぃ』
「о г н и в о」(ognivo)	「火打ち石」	『ふぃうち』
「О г н и в о」(ognivo)	「火打用の鉄片、火うち石」	『ふぃうち』
「о к о л н ы й」(okolnyi)	「近くの、脇の」	『わきのと』
「О к о л н ы и」(okolnyi)	「付近の」	『わきのと』
「о к р у ж а ю」(okruzhayu)	「円くする」	『まるする』(まるくする)
「О к р у ж а ю」(okruzhayu)	「円くする、取囲む」	『まるなす』

「ｏ к р у г л ы й」(okruglyi)　「円い」　『まるかもん』
「Ｏ к р у г л ы и」(okruglyi)　「円い」　『まるかと』

「ｏ к р у г л о с т ь」(okruglosti)　「丸みのあること」　『ぐりっとんこと』
「Ｏ к р у г л о с т ь」(okruglosti)　「円いこと」　『まるかこと』

「ｏ к у п ъ」(okup')　「身のしろ金」　『　』
「Ｏ к у п ъ」(okup')　「買いもどし」　『かうこと』

「ｏ л о в о」(olovo)　「錫」　『すず』
「Ｏ л о в о」(olovo)　「錫」　『すず』

「ｏ л о в я н ы й」(olovyanyi)　「錫の」　『すずのと』
「Ｏ л о в я н ы и」(olovyanyi)　「錫の」　『すずのと』

「ｏ м е т ъ」(omet')　「投げすてるもの」　『ちり』
「Ｏ м е т ъ　ｓ о р ъ」(omet' sor')　「塵」　『ちる』

「ｏ п а к О」(opako)　「あおむけに」　『ふぃっくいかいぇち』(ひっくりかえって)
「Ｏ п а к О」(opako)　「ひっくり返しに、反対に」『ちぇむきがわるぃ』(手むきがわり)

「ｏ п а с а ю с я」(opasayusya)　「用心する」　『かんげする』(かんがえする)
「Ｏ п а с а ю с я」(opasayusya)　「用心する」　『ゆじんする』(用心する)

「ｏ п а с н ы й」(opasnyi)　「用心深い」　『かんげんと』(かんがえの)
「Ｏ п а с н ы и」(opasnyi)　「用心深い」　『ゆじんのと』(用心の)

「ｏ п р и ч ь　к р о м е」(oprichi krome)　「～の外に」　『べち』
「Ｏ п р и ч ь」(oprichi)　「除いて」　『べち』

「ｏ п о н а」(opona)　「蔽い」　『たすくるふと』(たすける人)
「Ｏ п о н а　з а в е с ъ」(opona zaves')　「幕」　『まく』

「ｏ п о р а」(opora)　「支え」　『つっぱい』
「Ｏ п о р а」(opora)　「支え、足場」　『つっぱい』

「ｏ п я т ь」(opyati)　「再び」　『また』
「Ｏ п я т ь」(opyati)　「又、再び」　『また』

「ｏｒａｌｏ」(oralo)　「鋤」　『すき』
「Ｏｒａｌｏ」(oralo)　「鋤」　『すき』

「ｏｒｕｚｈｉｅ」(oruzhie)　「兵器」　『ちぇっぷ』
「Ｏｒｕｚｈｉｅ」(oruzhie)　「武器」　『ちぇっぷ』

「ｏｒｙｕ」(oryu)　「耕す」　『すく』
「Ｏｒｙｕ」(oryu)　「耕す」　『たすく』

「ｏｓｋｏｍｉｎａ」(oskomina)「酸っぱい果物などを食べたための歯のいたみ」『くうぃこみ』
「Ｏｓｋｏｍｉｎａ」(oskomina)　「酸味による歯の浮き」　『ふぁのすびっこと』
村山七郎注　cf. スビク　歯や頭が痛む。大分県玖珠郡。寒さで歯がしみる。対馬。
寒さで手足などが刺すように痛む。福岡・熊本・鹿児島県肝属郡。TZH.

「ｏｓｏｂａ」(osoba)　「貴人」　『べちなと』（別な）
「Ｏｓｏｂａ」(osoba)　「有名な人」　『しいぇたふと』（しられた人）

「ｏｓｏｂｎｙｉ」(osobnyi)　「特別な」　『べちなとんと』
「Ｏｓｏｂｎｙｉ」(osobnyi)　「独立の」　『べちなと』

「ｏｓｏｂｉ」(osobi)　「別に、離れて」　『べち』
「Ｏｓｏｂｉ」(osobi)　「別に」　『べち』

「ｏｓｔａｔｏｋъ」(ostatok')　「残り」　『のこったこと』
「Ｏｓｔａｔｏｋъ」(ostatok')　「残り、残り物」　『のこい』

「ｏｃｈｅｎｉ」(ocheni)　「非常に」　『きつ』
「Ｏｃｈｅｎｉ」(ocheni)　「大層、はなはだ」　『くつ』

「ｏｓｈｉｂъ　ｈｖｏｓｔъ」(oshib' khvost')「尻尾」　『しるを』
「Ｏｓｈｉｂъ　ｈｖｏｓｔъ」(oshib' khvost')「尾」　『しるを』

３．「щ」(shch)

「щ」(shch)は、「ш」(sh)と「ч」(ch)とか、「ｃ」(s)と「ч」(ch)とか、「ｃ」(s)と「т」(t)とか、ふたつの子音がひとつの文字の中にはいっているようなものなので、ふたつの文字を独立させてつづることもできる。「щ」(shch)と、ふたつの文字にわけたつづりの、両方のみだし語が重複してのっている例がある。

「ｓｃｈａｓｔｉｅ」(schastie)　「幸福、僥倖」　『かいぇ』
「ｓｈａｓｔｉｅ」(shchastie)　「幸福、幸運」　『かいぇ』

「с ч и п л ю」(schiplyu)	「ひきむしる」	『つむ』
「щ и п л ю」(shchiplyu)	「摘む、むしる」	『つむ　むしる』
「ч и с т ю」(chistyu)	「綺麗にする」	『きいぇになす』
「ч и щ у」(chishchu)	「綺麗にする」	『きいぇにする』

４．接辞の表記

４．１　「и з」(iz)

ロシア語の「и з」(iz)という接辞のうしろに、無声子音ではじまることばがつくと、無声化して「и з」(iz)が(is)と発音される。現代ロシア語では、この無声化をつづりに反映させ「и с」(is)とつづるが、18世紀には、現代ロシア語の正書法は確定していなかったから、ゴンザの辞書では「и з」(iz)とつづったり、「и с」(is)とつづったり、混在している。そうすると、ひとつのことばが、「и з」(iz)のつづりと、「и с」(is)のつづりの両方でみだし語になる、という例がかなりでてくる。

「и з к у ш а ю」(izkyshayu)	「誘惑する」	『だまかす』
「и с к у ш а ю」(iskyshayu)	「試して見る」	『しちぇみる』（してみる）
「и з к у ш е н и е」(izkyshenie)	「誘惑すること」	『だまかすこと』
「и с к у ш е н и е」(iskyshenie)	「試してみること」	『しちぇみること』
「и з п о л н я ю」(izpolnyayu)	「遂行する」	『する』
「и с п о л н я ю」(ispolnyayu)	「補足する」	『たす』
「и з п у щ а ю」(izpushchayu)	「出す」	『だす』
「и с п у щ а ю」(ispushchayu)	「出す」	『だす』
「и з т л е в а ю」(iztlevayu)	「腐る」	『くさゆる』
「и с т л е в а ю」(iztlevayu)	「腐る」	『くさらかす』
「и з т о ч а ю」(iztochayu)	「流出させる」	『だしとる』
「и с т о ч а ю」(istochayu)	「流れ出る」	『だす』
「и з т о ч н и к ъ」(iztochnik')	「水脈」	『みぞ』
「и с т о ч н и к ъ」(istochnik')	「源泉、水脈」	『こむぞ』（小溝）

「и з т о щ а ю」(iztoshchayu)　「栄養不良で極端に衰弱する」『うつす』

村山七郎注　cf. ウツホ　なかがからであること。　ウツヲ　内部がうつろで中空な（もの）。

ウツヲナ脈　非常に衰え弱った人の脈拍　日葡。

「и с т о щ а ю」(istoshchayu)	「衰弱する」	『くつなる』（きつくなる）

「и з т р е з в л я ю с я」(iztrezvlyayusya)「しらふにかえる」　『いぇさまかす』
「и с т р е з в л я ю с я」(istrezvlyayusya)「しらふにかえる」　『いぇさまかす』

「и з т я з у ю」(iztyazuyu)　「尋ね求める」　『たぬる』（たずねる）
「и с т я з у ю」(istyazuyu)　「拷問する」　『たぬる』

「и з х о д ъ」(izkhod')　「出ること、出口」　『づること』
「и с х о д ъ」(iskhod')　「出ること」　『づること』

「и з х о ж д у」(izkhozhdu)　「出る」　『づる』
「и с х о ж д у」(iskhozhdu)　「出る」　『づる』

４．２　「р а з」(raz)

「р а з」(raz)という接辞も、「и з」(iz)とおなじように、ゴンザの辞書では「р а з」(raz)とつづったり、「р а с」(ras)とつづったり、混在している。やはり、ひとつのことばが、「р а з」(raz)のつづりと、「р а с」(ras)のつづりの両方でみだし語になる、ということがでてくる。

「р а з п а л я ю」(razpalyayu)　「焼く」　『やく』
「р а с п а л я ю」(raspalyayu)　「燃やす」　『やきたくる』

「р а з п р а в л я ю」(razpravlyayu)　「まっすぐにする」　『すぐなす』（まっすぐにする）
「р а с п р а в л я ю」(raspravlyayu)　「まっすぐにする」　『ゆなす』（よくする）

「р а з п р а в л е н и е」(razpravlenie)　「まっすぐにすること」　『すぐなすこと』
「р а с п р а в л е н и е」(raspravlenie)　「まっすぐにすること」　『ゆなすこと』

「р а з ч и с л я ю」(razchislyayu)　「勘定わけをする」　『かんじぇわくる』(かぞえわける)
「р а с ч и с л я ю」(raschislyayu)　「数える」　『かずする』

「р а з ч и с л е н н ы и」(razchislennyi)　「勘定わけをしたる」　『かんじぇわけたと』
「р а с ч и с л е н н ы и」(raschislennyi)　「数えたる」　『かずしたと』

４．３　「в о з」(voz)

「в о з」(voz)という接辞も、「и з」(iz)や「р а з」(raz)とおなじように、ゴンザの辞書では「в о з」(voz)とつづったり、「в о с」(vos)とつづったり、混在している。やはり、ひとつのことばが、「в о з」(voz)のつづりと、「в о с」(vos)のつづりの両方でみだし語になる、ということがでてくる。

「в о з п и с у ю」(vozpisuyu)　「書きつける」　『ゆかく』（よくかく）
「в о с п и с у ю」(vospisuyu)　「書く」　『かく』

「в о з ъ п о м и н а ю」(voz'pominayu)　「回想する」　『たぬる』（たずねる）
「в о с п о м и н а ю」(vospominayu)　「回想する」　『おわさする』村山七郎注「噂する」

「в о з п о м и н а т е л ь」(vozpominateli)「回想者」　『たぬるふと』
「в о с п о м и н а т е л ь」(vospominateli)「回想する人」　『おわさするふと』

「в о з п р и е м л ю」(vozpriemlyu)　「名付親となる」　『でする』（代する）
「в о с п р и е м л ю」(vospriemlyu)　「受取る」　『うけとる』

「в о з п р и е м л и к ъ」(vozpriemlik')　「名付親、教父」　『でするふと』
「в о с п р и е м л и к ъ」(vospriemlik')　「受取る人」　『うけとるふと』

「в о з ъ п р е щ а ю」(voz'preshchayu)　「禁止する」　『さしぇん』（させない）
「в о с п р е щ а ю」(vospreshchayu)　「禁止する」　『いわしぇん』（いわせない）

「в о з ъ п р е щ е н и е」(voz'preshchenie)「禁止」　『さしぇんこと』
「в о с п р е щ е н и е」(vospreshchenie)　「禁止」　『いわしぇんこと』

「в о з п р е т и т е л ь」(vozpretiteli)　「禁止する人」　『さしぇんふと』
「в о с п р е т и т е л ь」(vospretiteli)　「禁止する人」　『いわしぇんふと』

「в о з х в а л я ю」(vozkhvalyayu)　「誉めちぎる」　『くつふぉむる』（きつくほめる）
「в о с х в а л я ю」(voskhvalyayu)　「称賛する」　『ふぉむる』

4．4　「c o」(so)

ロシア語には「c」(s)という接辞がある。「c」(s)は無声子音ひとつだけなので、つぎにくる音によっては発音しにくい。だから発音しやすいように母音をいれて(so)というように発音される。このことをつづりに反映させると「c o」(so)というつづりになる。18世紀には、現代ロシア語の正書法は確定していなかったから、ゴンザの辞書では「c」(s)とつづったり、「c o」(so)とつづったり、混在している。これについても、ひとつのことばが、「c」(s)のつづりと、「c o」(so)のつづりの両方でみだし語になる、ということがでてくる。

「c к р ы в а ю」(skryvayu)　「隠す」　『かくす』
「c о к р ы в а ю」(sokryvayu)　「隠す」　『かくす』

「c к р ы в а ю с я」(skryvayusya)　「隠れる」　『かくゆる』
「c о к р ы в а ю с я」(sokryvayusya)　「隠れる」　『かくゆる』

「c к р ы т ы и」(skrytyi)　「隠れたる」　『かくうぃたと』
「c о к р ы т ы и」(sokrytyi)　「隠れたる、外に現われぬ」『かくうぃたと』

「с п р е б ы в а ю」(sprebyvayu)　「一緒に居る」　『ふとつぃおる』
「с о п р е б ы в а ю」(soprebyvayu)　「一緒に居る」　『ふとつぃおる』

「с п р я г а ю」(spryagayu)　「結び付ける、結合する」　『ふとつぃなす』
「с о п р я г а ю」(sopryagayu)　「結び付ける、連結する」　『つぐつる』

「с г у щ а ю」(sgushchayu)　「濃くする、濃厚にする」　『こゆなす』
「с о г у с т я ю」(sogustyayu)　「濃くする」　『こゆなす』

「с ч и н я ю」(schinyayu)　「(演説、説教、音楽を) 作る」　『する』
「с о ч и н я ю」(sochinyayu)　「著作する」　『つくる』

「с ч и с л е н и е」(schislenie)　「数え方、計算」　『かんずること』
「с о ч и с л е н и е」(sochislenie)　「勘定すること」　『かんずること』

「с ч и с л я ю」(schislyayu)　「数える、計算する」　『かんずる』
「с о ч и с л я ю」(sochislyayu)　「勘定する」　『かんずる』

「с ш и в а ю」(sshivayu)　「縫い合わす」　『ぬぃやう』(ぬいあう)
「с о ш и в а ю」(soshivayu)　「縫いつける」　『ぬぃつくる』(ぬいつける)

４．５　「з」(z)

「с」(s)という接辞が「з」(z)という形になることは、現代ロシア語ではないが、ゴンザの辞書にはでてくる。教会スラヴ語にはあったらしい。セルビア語にもあるらしい。どういう条件で「с」(s)が「з」(z)になるのか、ロシア語の辞書にはでていないが、有声子音の前で「с」(s)が有声化して「з」(z)になるということらしい。これについても、おなじことばが、「с」(s)または「с о」(so)のつづりと、「з」(z)のつづりの両方でみだし語になる、という例がみつかった。

「с о б и р а ю」(sobirayu)　「集める」　『といやつむる』
「з б и р а ю」(zbirayu)　「取り集める」　『といやつむる』

「с о б о л е з н у ю」(soboleznuyu)　「同情する」　『きやむする』
「з б о л е з н у ю」(zboleznuyu)　「同情する」　『おしがる』

「с о б о р ъ」(sobor')　「大集会」　『あつまること』
「з б о р ъ」(zbor')　「取り集めること」　『といやつむること』

「с о г у с т я ю」(sogustyayu)　「濃くする」　『こゆなす』
「з г у щ а ю」(zgushchayu)　「濃くする」　『こゆなす』

「с г у щ е н и е」(sgushchenie)	「濃くすること」	『こゆなすこと』
「з г у с т е н и е」(zgustenie)	「濃くなすこと」	『こゆなすこと』
「с о г н и в а ю」(sognivayu)	「腐る」	『くさゆる』
「з г и в а ю」(zgivayu)	「腐る」	『くさゆる』

４．６　「в о」(vo)

ロシア語の「в」(v)という接辞も「с」(s)とおなじように、音韻の条件によって、発音しやすいように母音をいれて(vo)というように発音されて、「в о」(vo)というつづりになる。現在の正書法が確定していなかった時代のゴンザの辞書では「в」(v)とつづったり、「в о」(vo)とつづったり、混在している。

「в г р у ж а ю」(vgruzhayu)	「積み込む」	『つむ』
「в о г р у ж а ю」(vogruzhayu)	「積む」	『つむ』

５．文語と口語

５．１　教会スラヴ語

ごんざの辞書には、おなじことばが、ロシア語（口語）のつづりと教会スラヴ語（文語）のつづりの両方でみだし語になっている例がたくさんある。

「г о р о д ъ」(gorod')	「都市、町」	『くに』（ロシア語）
「г р а д ъ　г о р о д ъ」(grad' gorod')	「都市、町」	『くに』（教会スラヴ語）

代表的な「г о р о д ъ」(gorod')と「г р а д ъ」(grad')の音の構造をかくと、つぎのようになる。

「г о р о д ъ」(gorod')　C1 + O + C2 + O+ C3　　Cは子音
「г р а д ъ」(grad')　　C1 + C2 + A + C3

「б о р о д а」(boroda)	「ひげ」	『ふぃげ』
「б р а д а」(brada)	「ひげ」	『ふげ』
「б о р о т к а」(borotka)	「小ひげ」	『こふぃげ』
「б р а т к а」(bratka)	「小ひげ」	『こふげ』
「б о р о д а т ы и」(borodatyi)	「ひげの多い」	『うふげ』
「б р а д а т ы й」(bradatyi)	「ひげの多い」	『うふげ』
「б о р о д а в к а」(borodavka)	「疣」	『たこ』
「б р а д а в к а」(bradavka)	「疣」	『たこ』

「в о р о б е й」(vorobei)　「雀」　『すずめ』
「в р а б и й」(vrabii)　「雀」　『すずめ』

「д о р о г и й」(dorogii)　「高価な」　『たけと』
「д р а г и й」(dragii)　「高価な」　『たけと』

「п о л о т н о」(polotno)　「亜麻布」　『さらし』
「п л а т н о」(platno)　「麻布」　『さらし』

「п о р о г ъ」(porog')　「しきい」　『あがいくち』
「п р а х ъ[☆п р а г ъ]」(prakh'[prag'])　「しきい」　『あがいくち』

「п о р о х ъ　п ы л ь」(porokh' pyli)　「塵」　『ごみ』
「п р а х ъ」(prakh')　「埃」　『ふぉこいぇ』

「п о р о ж н и й」(porozhnii)　「空（から）の」　『うつったと』
「п р а з(д)н ы и」(praz(d)nyi)　「空虚な、空（から）の、暇の」　『うつったと』

「н е п о р о ж н ы й」(neporozhnii)　「仕事に熱中的な」　『うつらんと』
「н е п р а з(д)н ы й」(nepraz(d)nyi)　「仕事に熱中している、多忙な」　『うつらんと』

「с о л о н о」(solono)　「塩からく」　『しをがかれ』
「с л а н о」(slano)　「塩辛く」　『しをがかれ』

「с о р о ч к а　р у б а х а」(sorochka rubakha)　「肌着　シャツ」　『ふぁだぎ』
「с р а ч и ц а」(srachitsa)　「シャツ」　『ふぁだぎ』

この項目は、ほかの項目とちがって、まちがえて重複してしまったのではなく、ボグダーノフが、意図的に教会スラヴ語とロシア語の両方の語形を収録しようとした可能性もある。

５．２　数詞

ゴンザの辞書にでてくる数詞は、教会スラヴ語が原則のようだが、数詞とほかのことばの複合語の中には、ロシア語と両方でているものもある。

「п я т н а т[д]ц а т ы и」(pyatnat[d]tsatyi)　「第15の」　『じゅごんと』
「п я т ь н а д е с я т ы и」(pyatnadesyatyi)　「第15の」　『じゅごんと』

「о д н о о к и й」(odnookii)　「１つ目の」　『ふとつめんと』
「е д и н о о к и й」(edinookii)　「一眼の」　『ふとつめんと』

「одноручий」(odnorukii)	「１つ手の」	『ふとつちぇんと』
「единоручий」(ednorukii)	「１つ手の」	『ふとつちぇんと』
「трепутныи」(treputnyi)	「三本道の」	『みつみちのと』
「троепутныи」(troeputnyi)	「三つの道の」	『みつみちのと』
「тройныи」(troinyi)	「三重の」	『みいぇんと』（三重の）
「троеныи」(troenyi)	「三重の」	『みっつぃねたと』(三つになした)

どれも上がロシア語で下が教会スラヴ語だとおもわれるが、下ふたつはよくわからない。

６．そのほかの微妙なつづり

微妙につづりがちがう、おなじ意味のみだし語のペアというのがいくつかある。

「студъ」(stud')	「恥」	『わるかこと』
「стыдъ」(styd')	「恥、羞恥」	『ふぁつかしこと』
「предъиду」(pred'idu)	「前に行く」	『まいぇいく』
「предиду」(predidu)	「前に行く」	『さきいく』
「оббегаю」(obbegayu)	「走り廻る」	『ふぁしるまわる』
「обегаю」(obegayu)	「走りまわる」	『ふぁしりまわる』
「овечии」(ovechii)	「羊の」	『ふつじのと』
「овчии」(ovchii)	「羊の」	『ふつじのと』

７．修飾語の位置

ロシア語の修飾語は、被修飾語の前でもうしろでもいいので、まったくおなじ意味なのに、修飾語が前についたものと、うしろについたものと、両方がみだし語になっている例が２つみつかった。

「весломъ　гребу」(veslom' grebu)	「櫂でこぐ」	『けうつ』（櫂うつ）
「гребу　весломъ」(grebu veslom')	「櫂で漕ぐ」	『けうつ』
「двоюродный брат」(dvoyurodnyi brat)	「従兄弟」	『いとご』
「брат двоюродный」(brat dvoyurodnyi)	「従兄弟」	『いとご』

直訳すると、上は（櫂でこぐ）と（こぐ、櫂で）、下は（ふたつのうまれの兄弟）と（兄弟、ふたつのうまれの）で、おなじ意味である。

８．おなじつづりのみだし語の重複

ゴンザの辞書には、まったくおなじつづりのことばが２回みだし語としてでてくる、という例がかなりたくさんある。もし、重複したみだし語がならんでいたら、ゴンザが気づいて訂正できる。ところが、ちがうページとか、はなれた位置にでてきたら、ゴンザは前に訳語をつけたことをわすれてしまって、重複がのこってしまう。

つまり編者のボグダーノフが

１　おなじことばを２回みだし語に採用した

２　そのどちらか（両方かも）をキリル文字のただしい順にしたがわない位置にいれた

という二重のミスをした結果がのこっているのである。

「в з г л я д ъ」(vzglyad')	「まなざし」	『めつき』
「в з г л я д ъ」(vzglyad')	「視線」	『みゆ』
「в л а ж у」(vlazhu)	「濡らす」	『ぬらかす』
「в л а ж у」(vlazhu)	「濡らす」	『ぬらかす』
「в с п я т ь」(vspyati)	「後へ」	『あとさめ』
「в с п я т ь　（☆и д у）」(vspyati (idu))	「後へ（行く）」	『あとさめ』
「д о л г о т а」(dolgota)	「長いこと」	『ながかこと』
「д о л г о т а」(dolgota)	「長さ、長いこと」	『ながかこと』
「и н о в и д н ы й」(inovidnyi)	「別な姿の」	『べちなみるとんと』
「и н о в и д н ы й」(inovidnyi)	「別な姿の（人）」	『べちのみるふと』
「и с к у с н ы й」(iskusnyi)	「熟練せる」	『いんぎなと』（慇懃な）
「и с к у с н ы й」(iskusnyi)	「上手な、巧妙な」	『きいぇなと』（きれいな）
「и с к у с т в о」(iskustvo)	「芸術、技術、熟練」	『いんぎなこと』
「и с к у с т в о」(iskustvo)	「芸術」	『きいぇなこと』
「л а с к а ю」(laskayu)	「かわいがる」	『ふぉむる』（ほめる）
「л а с к а ю」(laskayu)	「可愛いがる」	『　　』
「м н ю」(mnyu)	「想像する」	『おむ』
「м н ю」(mnyu)	「考える」	『おむ』
「н е х и т р ы й」(nekhitryi)	「面倒ならざる、簡単な」	『ただんと』
「н е х и т р ы й」(nekhitryi)	「巧妙でない」	『でぃくにねと』

「о б в о ж д у」(obvozhdu)　「引きまわす」　『ふぃきまわす』
「о б в о ж д у」(obvozhdu)　「引きまわす」　『ふぃくます』

「О б х о ж д у」(obkhozhdu)　「歩きまわる」　『さるきまわる』
「О б х о ж д у」(obkhozhdu)　「まわる」　『まわる』

「п о д з ы в а ю」(podzyvayu)　「誘い出す」　『させだす』（さそいだす）
「п о д з ы в а ю」(podzyvayu)　「呼びよせる」　『よびだす』

「п о м о р с к и й」(pomorskii)　「海の傍の」　『うみのふぁたんと』
「п о м о р с к и й」(pomorskii)　「沿海地方の」　『ふぁまばたんと』

「п о р а ж а ю」(porazhayu)　「撃破する」　『かつ』
「п о р а ж а ю」(porazhayu)　「撃破する」　『かつ』

「п о р о д а」(poroda)　「家柄、一族」　『むまゆること』
「п о р о д а」(poroda)　「家柄、一族」　『むまいぇつき』

「п р е з и р а т е л ь」(prezirateli)　「軽視する人、見下げる人」『みるふと』
「п р е з и р а т е л ь」(prezirateli)　「軽視する人」　『みるふと』

「п р и у ч а ю」(priuchayu)　「教える」　『おそゆる』
「п р и у ч а ю」(priuchayu)　「教える」　『おそゆる』

「р а з л и ч а ю」(razlichayu)　「色分けする、見分ける」　『いろわくる』
「р а з л и ч а ю」(razlichayu)　「色分けする」　『いろわくる』

「р а з мЕ н и в а ю」(razmenivayu)　「換える」　『かゆる』
「р а з мЕ н й в а ю」(razmenivayu)　「換える」　『かゆる』

「с о х н у　о　в о д ы」(sokhnu o vody)　「乾る」　『ふぃる』
「с о х н у　о　в о д ы」(sokhnu o vody)　「乾る」　『ふぃる』

「с о х н у　ч а х н у」(sokhnu chakhnu)　「痩せる　衰弱する」　『やする』
「с о х н у　ч а х н у」(sokhnu chakhnu)　「痩せる」　『やする』

「с о ч и с л я ю」(sochislyayu)　「勘定する」　『ふとつぃかんずる』
「с о ч и с л я ю」(sochislyayu)　「勘定する」　『かんずる』

「ｃ ｃ ｅ к а ю」(ssekayu)　「切り離す」　『うちきる』
「ｃ ｃ ｅ к а ю」(ssekayu)　「切り離す」　『すたむる』

「т о л к а ю」(tolkayu)　「押す、突く、突きやる」　『つくじる』
村山七郎注　cf. ツクジル　つつきまわす　熊本・鹿児島県肝属郡　TZH.
「т о л к а ю」(tolkayu)　「突く、押す」　『つきおとす』

「т о ч е н и е」(tochenie)　「研ぐこと」　『とぐこと』
「т о ч е н и е」(tochenie)　「研ぐこと」　『とぐこと』

「у з ы」(uzy)　「枷」　『あしのかけ』
「у з ы」(uzy)　「枷」　『あしのかけ』

「у к о р я ю」(ukoryayu)　「叱責する、とがめる、非難する」『がりつくる』
村山七郎注　cf. ガル　叱る。九州　TZH.
「у к о р я ю」(ukoryayu)　「叱責する」　『がる』

「у м и л е н и е」(umilenie)　「憐憫」　『むぞかこと』
村山七郎注　cf. ムゾカ　愛らしい、かわいらしい。熊本県葦北郡・宮崎県西諸県郡・鹿児島。TZH
「у м и л е н и е」(umilenie)　「同情」　『なかとること』
村山七郎注　cf. ナカ（中）　友情関係。日葡

「у с ы п а ю」(usypayu)　「振りかける」　『ふる』
「у с ы п а ю」(usypayu)　「振りかける」　『ふる』

「ш е с т ы и」(shestyi)　「第６の」　『むつのと』
「ш е с т ы и」(shestyi)　「第６の」　『むつのと』

９．番外　重複の回避

みだし語のつづりがひとつに確定できない、という、編者に責任のない重複の場合には、「～をみよ！」というようにかいて、一方からもう一方におくるという対策をとることができる。しかし、その対策がとってある項目は、重複した項目とくらべてとてもすくない。

「м о л о к о」(moloko)　з р и　м л е к о　「м л е к о参照」
「м л е к о」(mleko)　「乳汁」　『ちち』

「б р и ю」(briyu)　з р и　б р е ю　「б р е ю参照」
「б р е ю」(breyu)　「剃る」　『そる』

「б р у ш у」(brushu)　з р и　б р е ж у　「б р е ж у参照」
「б р е ж у」(brezhu)　「夢みる」　『ゆめみる』

「в л е к у」(vleku)　з р и　в л а ч у　「в л а ч у参照」
「в л а ч у」(vlachu)　「引きずる」　『そびく』

「в е к о」(veko)　з р и　в е ж д а　「в е ж д а参照」
「в е ж д и」(vezhdi)　「まぶた（瞼）」　『まぷた』

「д в е н а т ц а т ь」(dvenattsati)　з р и　д в а н а д е с я т ь
「д в а н а д е с я т ь参照」
「д в а н а д е с я т ь」(dvanadesyati)　「12」　『じゅに』

「л о ш к а」(loshka)　з р и　л ж и ц а　「л ж и ц а参照」
「л ж и ц а」(lzhitsa)　「匙」　『さじ』

「м о щ у」(moshchu)　з р и　м о с т ю　「м о с т ю参照」
「м о с т ю」(mostyu)　「橋板を敷く」　『ふぁしする』

「и с п и в а ю」(ispivayu)　з р и　и з ъ п и в а ю　「и з ъ п и в а ю参照」
「и з п и в а ю」(izpivayu)　「飲む」　『のむ』

「и с ч и с л я ю」(ischislyayu)　з р и　и з ч и с л я ю　「и з ч и с л я ю参照」
「и з ч и с л я ю」(izchislyayu)　「数える、算出する」　『かんじぇちみる』

10. おわりに

重複したみだし語に対して、ゴンザがおなじ訳語をかいた項目も、ちがう訳語をかいた項目もある。1960 年代にこの辞書を発見した村山七郎は、1985 年に訳注をくわえて日本版を出版したが、重複したみだし語に対して、村山七郎がちがう訳語をかいた項目もかなりある。日本版は複数の人物が下訳をした可能性があるが、ゴンザはひとりぼっちで訳語をかく作業をした。ひとつのロシア語に対してゴンザがふたつの訳語をかいたことは、ゴンザの心の中の辞書にそのふたつのことばが類義語として収納されていることをしめしている。このことにも資料的価値がある。

参考文献

いぬかいいて(2016)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の訳注の問題点」『日本方言研究会第102回研究発表会発表原稿集』, 13-20
上村忠昌(2006)『漂流青年ゴンザの著作と言語に関する総合的研究』南日本新聞開発センター
村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館
村山七郎(1985)『新スラヴ・日本語辞典』ナウカ